

近世城下町プランの発展類型——序説

矢 守 一 彦

【要約】 城下町の研究は、一見、《形態論》をこえた段階にきているように云われながら、実はその体系的な研究は十分果されて  
いないように思われる。例えば城下町プランの系譜をあとづけるような仕事は、ようやく緒についたばかりといえる。本稿では近世  
城下町プランに五つの類型を設定し、その発展系列を考えてみようとしたものである。いささかでも論旨の簡潔を期するため、最  
初、第I節において、一応の要約としての《仮説》をのべ、第II節において、これを例証することにした。

は し が き

③ 近世城下町は封建都市の《典型》である。それは大名領国と  
いう一箇の《地域的単元》を編成する核であるという点で、しか  
もそれ自体の都市プランが封建的ヒエラルキーの地表景観への具  
体的投影であるという点で、歴史地理学にも問題が多い。④

⑤ しかし、本稿では問題を「都市プラン」に限りたい。それも  
努めてモルフオロギッシュに考察してゆきたい。

かつて奥井復太郎は、ドイツ都市計画の史的考察にあたり、  
「非技術家である所の者が都市計画に関係し得る範囲は之を除い  
て他にない」として、「地理的發展に基礎を置き文化的發展の傾

向を探らんとする方法、所謂「Kartographische Methode」を採  
つた。また H. J. Fleure は、ヨーロッパ中世都市のプランに表わ  
れた文化史の流れを横倒しにして、七つの地域的類型を検出する  
という仕事をみせてくれた。⑥ 同様の方法は近くは R. E. Dickin-  
son によつても、ドイツ中世都市について試みられている。——  
小稿の企図するところが、かつての単なる形態研究への地理学史  
上の逆行に了らなければ幸せである。

⑦ 近世城下町の《景観》ないし《形態》についての研究は、一  
見、なしくされたかの観がある。しかし願みるとき、曰く水系  
の防禦の利用、曰く社寺配置・道路屈折にみられる軍事的願慮、  
また曰く身分別・職業別居住区の設定 etc. —— 小野均以来、わ

れわれには城下町プランの典型像ができて上つていて、その《概説》という尺度入りのレンズをすべての城下町絵図に当てている傾向があるように思われる。確かに、すべての城下町プランに通用の要素が認められることは、先学の説かれるとおりである。けれども、諸城下町は、④それぞれ成立期を異にするとともに、⑤同一城下町においても、建設期・完成期・崩壊期では、そのプランに容が追跡されるのである。この④・⑤ともに、そこには藩構造の差異や幕藩体制の変質過程が反影しているとみてよいだろう。

ところで、④・⑤の場合をあわせれば、古図の示してくれる城下町プランは多数にのぼるが、それらを照合するとき、幾つかの類型が検出でき、しかもその諸類型は、一つの発展系列にそつてゐるかの如くである。——近世城下町プランの発展的類型とその進化系列とを設定すること、これが小稿の目標である。

\* 城下町プランにヴァラエティを賦与しているいま一つの大きな因子が、城下町の立地基盤の自然的条件であることは云うまでもない。しかし、これについては既に多くが説かれているので、敢てふれることをしない。ここでは、さように多様な自然的条件にも拘らず、それらを克服して、そこに貫かれていたプランのなかに、発展的類型を見出してゆくというのである。<sup>①</sup>

なお小論は、主として刊本所収の古図や文献など、手近かにある極く限られた材料によつて組立てた《仮説》であつて、例えば個

個の城下町についての実地計測など、後日に残された問題が頗る多い。で、ここでは「序説」とした。

## I 五つの類型

最近、戦国時代から江戸時代にかけての城下町の構造を、時代的に三つくらいにわけようとする試みが、提起されあるいは示唆されている。<sup>②③④</sup> 私はこれらの卓れた論致からうけた御教示に謝しつつ、近世城下町プランを五つの類型に分けてみようと思う。

(A)型 城砦と城下町とが垂直的に甚だしく距つてゐるもので、高取型あるいは岡型とでも名付けたいタイプである。このように城は山上、城下は山麓というケースは、いわゆる中世城下町には多くみられたところであるが、高取や岡を近世城下町プランにおける(A)型の代表事例としてあげるのは、それらが幕末にいたるまで、いわゆる中世的な、原初的形態を持続したからに他ならない。

系譜的に②豪族屋敷につながる城および給人居住域と、③市場集落の転化である城下町屋との水平的距離のへだたりは、中世城下町ではほぼ普遍的属性であつたが、殆んどの場合、次の時期に、かかる水平的距離を解消することによつて、近世的城下町を形成してきている。岡の場合は、<sup>⑤</sup>城砦と城下町との比高は約一〇〇米、高取においては約四三〇米である。つぎの(B)型以下への進化を阻碍した要

因として、この垂直的距離のもつ役割は大きい。

(B)型いわば総郭型<sup>\*</sup>。前記の④と⑥とが、このプランではともかくも近接する。あるいは混在する。この混在か否かによつて、(B<sub>1</sub>)・(B<sub>2</sub>)というサブタイプを設定しよう。両者のなかには、(B<sub>1</sub>)↓(B<sub>2</sub>)という前後関係がある。(B<sub>1</sub>)では総郭のなかに田地をも包含することが多いが、(B<sub>2</sub>)になると(B<sub>1</sub>)では混在していた武家屋敷と町屋とが、地域的に明分され、道路計画に直交状が卓越してくる。

中世都市と近世都市における景観上の相異点として、前者の遠心的開放性・自然成長的無計画性に対し、後者の求心的凝集性・計画的秩序性が指摘されている。(B<sub>1</sub>)↓(B<sub>2</sub>)は、(B<sub>1</sub>)以前から(B<sub>1</sub>)への進化とともに、右の言にみえる過程を辿りつつあるものである。しかも両者に共通するのは、濠・土壘などもつてする「総構え」である。

城下の総郭は、結城（弘治年間）などにはじまり、天正末年の小田原城下あたりが、他城下における総郭型繩張りの「手本」にされたものであろうとの説もあり、戦国時代<sup>⑩</sup>と安土桃山の城下町の特徴とされているが、江戸時代に入つてからのプランにも総郭はあらわれる。

結城・足利・小田原・岩槻・徳吉・鳥取・桑名・八代……〔土居と濠〕、姫路……〔石壁と濠〕、岡山・甲府・飯田・金沢……〔濠〕<sup>⑪</sup> 諸書にひかれる例は以上の如くである。

\* 以下、土・石等をもつてする星・垣、また水濠・河川分流（多くは土手をもつが）などの水系、空濠など、囲郭としての構造物や意識的に利用された地形地物のうち、最外側にあるものを「総郭」とよぶ。序でながら、大手門より内を「城内」とよぶ。だから「城内」「郭内」ではない。

(C)型 つぎの(D)型とともに、幕藩体制の成立期に新設ないし改修された城下町プランに卓越するタイプであり、かの階層的身分制や、軍事的都市としての配慮が、城下町の地域制として最も見事に顕現している型である。わが近世城下町は、慶長二〇年間ならびにその後、陸統として出現し、その数は全城下町の殆んどを占めるし、また建設期においては(B)型プランをしめた城下町も、やがて(C)型ないし(D)型への移行を辿るケースが多い。だから地域制云々の「概説」が、正に概説として通用するのである。しかし、ここでそれを繰返す要はあるまい。

(C)型の特色として重視したいのは、——私はこの視角より、(D)型とこれとを分けたのであるが——、内町と外町との区分という点である。外町の出現といつてもよい。(B)型では、もとよりすべての町屋が、総郭内に収められていたが、(C)型においては、主要町屋のみを、ハイクラスの武家屋敷とともに外郭内（多くは外濠と内濠との間）に配置し、主要ならざる町屋、新設町屋は外郭の外側においているのである。（もつとも、外町のさらに外側を、下級士族、足

軽などの屋敷群、あるいは社寺群をもつてカヴァーしている点が(C)型の特色で、(E)型ではその企図さえ、都市プランの上から消滅してゆく。

もちろん、内町・外町の呼称は地子免の有無によつてなされる場合が多いが、原初的なし原則的には、外郭の内が内町である。では、内町あるいは外町は、(B)型の総郭のうちに残されるか、或いは外へ押出されるかによつて生ずるかという点と、必ずしもそうではないようである。つまり、原理的にはそういう(B)型→(C)型の想定がなり立つと思うし、事実その例も多いが、一方、(C)型プランを通りこして、(B)型→(D)型というケースも尠くない。それでは(D)型とはどういうプランか。

(D)型 爾余の点では(C)型に等しいが、これはもはや外郭内には武家屋敷しかとどめない型である。町屋はすべて郭外である。

ところで、新城下町としての建設の時期を同じくしながら、(C)型と(D)型という、かなり大きな相異点をもつ二つの都市プランが生じた因はどこにあるのだろうか。

④ 先ず考え得ることは、大大名の城下町は(C)型であり、小大名の城下町は(D)型を採るとのこと。――Ⅱ節でみる如く、ただ一筋の往還の両側のみ町屋の発達するような小規模の城下町には(D)型が多い。しかし、そればかりではなさそうである。同クラスの城下

町でありながら、(C)型もあれば(D)型もある。

⑤ 原田伴彦は近世都市の形成を、中世都市との系譜的関連より考察し、かつて小野均が「建設都市」としての性格を強調した城下町のなかにも、すでに中世期に都市もしくは都市的集落として成長していたものの、近世的粉飾、即ち既存の中世都市が新城下町として改造再生したケースの多かつたことを、例証されている。

すなわち、一見、新しき建設都市であるかの如き近世城下町にも、(1)厳密な意味での新しき都市建設と、(2)幾許かの都市的要素をもつていた中世都市ないし中世集落の改編という二つが存在したわけで、私はこの(1)が(C)型プランを採用し、(2)が多く、(D)型を採用したのではなかつたかと推定する。

(1)の場合、即ち原野に忽焉として新城下を出現させようとするに際し、地子免除などの優遇策をもつて、有力商人を誘致し保護したことは既に説かれている。(1)の場合、(B)型すくなくとも(C)型プランをとることの多かつた所以である。これに対し、(2)の場合、(1)の場合ほどには、それが必須条件ではなかつた。殊にそこが中世末において、宿場町・港町・市場町・門前町として、あるいは中世城下町として、ある程度発達していた場合には、新封の領主は、その都市プランの近世的な改造に際し、たとえ地子免等の保護策を施すにせよ、一方、武家屋敷地区と町屋地区との間に、身分的秩序の一線

を劃することを、より重視したのではなかつたか。郭内に町屋を一切包摂しない(D)型プランの出現は、このような契機に発するのではあるまいか。

もう一つ。「内山下」の公用地化ということがある。これは(D)型のみ属性というより、(B)型↓(C)型・(D)型、あるいは(C)型↓(D)型の移行期に認められる傾向である。大手門と搦手門より内側、即ち城内は、かつては領主の一族ないし重臣の武家屋敷よりなる「内山下」が形成されていたが、幕藩体制の整備につれて、これが藩庫・御座所・城内広場などの公用地に転化されてゆくのである。詳細な具体例は第Ⅱ節でのべるが、例えば高知城下について、「内山下」の「郭中」への移動に伴い、「郭中」に存在した町屋が「郭外」に押し出されてゆく経過とその適確な意味づけが報じられている。

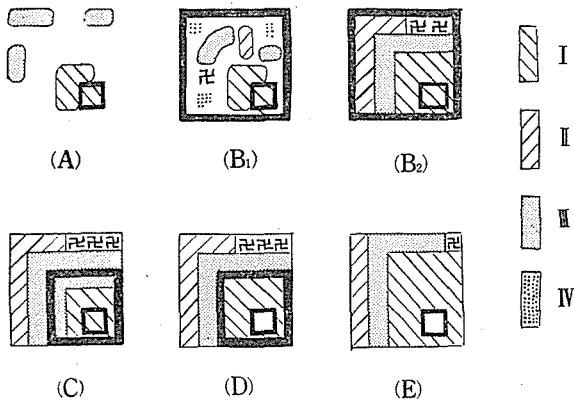
かかる点より、出現の時期をほぼ同じである(C)型と(D)型との間に、(C)型↓(D)型という順序を仮定したのである。

(E)型 江戸時代中期以降、つまり元和偃武後、一〇〇余年を經過のちに成立した城下町に代表されるプランであつて、例えば鯖江の如く、武家屋敷をも郭で囲むことをやめた型となる。もつとも、発展的な城下町においては、当初、(B)・(C)・(D)型プランを示したものに、例えば街道沿いに町屋が伸長するなどして、プランの原型に変容をみせてゆくのが一般であるが、江戸時代初期においては、町

屋地区の膨脹に即応して、適宜、足輕屋敷・社寺などを、さらにその外側に移動配置していた。即ち、たえず(C)型的に改編されていたところが、この時期になると、そのような配慮をやめる。それ故、幕末期の城下図になれば、原型は何型であれ、殆どどの城下町が部分的には(E)型的要素を具えるに至るわけである。

(F)型 これは崩壊型プランである、というより、近世城下町としては、都市プランそのものの崩壊過程にあるものである。したがつて、城下町プラン全体が(F)型という城下町のあろう筈がない。(F)型的要素は、(E)型とともに、部分的には藩政後期〜末期における大半の城下町にあらわれたと想定されるが、実際上のプランの上で、それを捉え得る資料は乏しい。

例えば、商工業独占機構の崩壊は、(1)城下町内部においては、地域制の無視という形で、景観の上であらわれ、(2)外部においては城下に近接した地域における外店の成立、在郷町の活動として城下町プランに挑戦してくる。また(3)都市細民の増加は、町屋間口の細分化現象(「後記」参照)を惹起するが、借屋が松代城下の「町外町」のごとく、あるいは享保以降の広島のごとく、武家屋敷や寺領をまで蚕食してくるようになると、いよいよ城下町プラン崩壊の感をふかくする。(4)また武士団の貧窮に伴う下級士族の家内工業も、それが家内にとどまつている限りは、少くともブ



第1図 近世城下町プランの5類型模式図

I…武家屋敷、II…足輕屋敷、III…町屋、IV…百姓屋太線…郭。  
 (D)・(E)の内郭内部の空白は「内山下」の公用地化をしめす。

要約

ランの上では(F)型とはいい得ないが、藩営マニユファクチュアなどの出現は、領主自ら、建設当初のプランを改革してゆかねばならなくなる可能性をふくむものであつた。

(1) 近世城下町のプランにみられる五類型、ならびにその発展系列を第1図の如き模式図に要約しようと思う。

(2) 五つの

類型には、それぞれそのプランの卓越した時期がある。しかし(A)~(E)は発展系列の順序をしめすもので、慶長以前に建設された城下町で、いきなり(D)型を採るものもあれば、江戸

時代中期に漸く(B)型プランをもつて新建設される城下町もありうる。

(3) 建設期にはいずれの型をとるにせよ、時とともに原則として

(A)↓(B)↓(C)↓(D)の方向に変容してゆく。だから、ある一定の(△)時の断面

——例えば幕末期をとれば、各城下町がその時までには到達した

(A)~(E)さまざまの段階にあるプランの分布を描くことができる。

(例えば幕末においてなお「内山下」を残存しているものと、然らざるものという如くにも)。その差異は藩構造の差、あるいは地域差によるものと予測されるが、その考察は次の機会をまちたい。

(4) 一つの城下町プランの変容が(A)↓(E)の系列に沿うばかりでなく、ある一つの領主に注目すれば、転封ごとに彼のうち出す城下町プランにも、この発展系列が見出せるのは興味ふかい事実のように思う。例えば井伊氏は天正一八年(一五九〇)、箕輪城に入部するが、別に政庁・居館を設けることなく、城をもつてこれをかねる。

箕輪城下は城郭山麓にふるくよりある市場集落である。ついで慶長三年(一五九八)、自ら城郭・城下を高崎に転ずるが、ここでつたのは正に総郭の城下町プランである。本稿の分類でいえば(A)型↓(B)型のケースである。ついで関ヶ原役後、井伊氏は三成の佐和山城に封ぜられるが、ここは(A)型であるから、直ちに典型的な(C)型である彦根城下町を新建設して移る。(A)↓(B)↓(C)のコースを辿ること、如是である。

またかつて小野均は、蒲生氏の日野↓松阪↓若松という推移より、町割の整備してゆく趨勢を述べられたが、私はさらに宇都宮をも加え、若松以降は(D)型プランに到達している点を指摘しておきたい。

## Ⅱ 仮説の検討

### (B)型以前について

(A)型や、(B)型すなわち総郭型を形成する以前の城下町は、基本的には「中世城下町」であつて、当面課題とするところより、やはずれる。もとより、前言せる如く(第I節(B)型の項)、相反した系譜を負う城郭ないし給人居住城と、市場集落という異質的部分域がそれでいて一つの集落を構成するに至る過程は、直接、(B)型プラン形成の序曲をなすものであり、殊に(B<sub>1</sub>)型は、島田豊寿のいわゆる《初期城下町》そのものであつたり、その要素を多分に残存しているものである。しかし、およそ古図に乏しいこの期の城下町プランの研究には、自ら別稿を準備しなければならぬ。

### (B<sub>1</sub>)型と(B<sub>2</sub>)型について

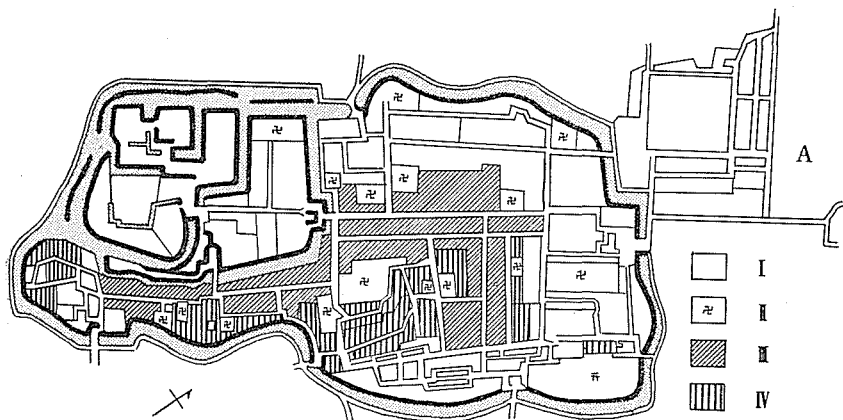
(B)型の事例は先に掲げた。その中に(B<sub>1</sub>)型と(B<sub>2</sub>)型のあることをのべた。(B<sub>1</sub>)型と目されるものとしては、例えば建設期の西尾・岩槻などがあげられよう。(B<sub>1</sub>)型には未だ《初期城下町》的要素が濃厚であるとはいつても、すでに総郭を構えるだけの段階に達しているのだから、

ら、郭内の地域性や道路にも、(B<sub>2</sub>)型へむかつての萌芽的な計画性は看取される。

西尾 承久三年(一二二一)以来、吉良氏、ついで酒井氏の本拠であるが、城地が近世的に再編成されたのは、天正一三年(一五八五)〜末年、田中氏によつてであり、総郭はおそく寛永一八年(一六四一)から明暦にかけて構築されたものである。栗原光政所引

「西尾城下図」<sup>⑨</sup>には、街村状の町屋地区に接して多くの農家群がみられ、足軽組屋敷がその外側に隣接して設定されるなど、古い要素を具えている。「文久二年、参覲交代の制緩むや、江戸在住の藩士多数当所へ移転し、居を外町の西に定め、其地も新屋敷と称するに至る」と記されているところをみれば、後代に外町の成立をみるに及んだと思われるが、「維新当時西尾之図」<sup>⑩</sup>には右のいわゆる新屋敷のみで、郭外町の発達はみられず、(たとえ存在しても、そこは「西尾」に属しないため描かなかつたと推定できるが、城下町プランの上では、それを城下に編入しなかつたこと、即ち「外町」にしなかつたことが問題である)郭内の百姓屋も、若干、武家屋敷に交替しているとはいえ、依然として残存しているのである(第2図)。

岩槻 長禄年間の築城とつたえられ、「所々の村民来り聚り、ここに住してより随て民居も広まり」<sup>⑪</sup>、永禄三年(一五六〇)からは、市場集落としても発展していた。天正一八年の落城で一時、住民が



第2図 西尾（「維新当時西尾之図」による。）

A…文久二年増設の「新屋敷」、太線…土塁・石垣、I…武家屋敷（一部外側は足輕屋敷）、II…寺院、III…町屋、IV…百姓屋。

離散したのち、慶長六年（一六〇二）入部した高力氏によって、近世城下町として再生せしめられる。「新編武蔵風土記稿」所載の図では、士・農・町の居住地が混在し、(B<sub>1</sub>)型をしめしているが、天保一四年（一八四三）の「岩槻城図」<sup>⑧</sup>では、総郭外南方に、一番町～六番町の直交状屋敷割や、新曲輪町、また江戸道・大門通に沿う町屋が(E)型として附加されている。しかし、総郭内部はまだ広大な田畑を包摂し、かつての(B<sub>1</sub>)型の残像をみせている。

ある時期に(B<sub>2</sub>)型を示した城下町は、次に掲げるもののほかにも多数ある。先に(B型)としてあげたもの(第I節)も、殆んど(B<sub>2</sub>)型であるし、(C)・(D)型プランを示している古図のなかにも、容易にかつての日の(B<sub>2</sub>)型を復原し得るものが尠くない。後述する。

高崎 前述のように、井伊氏が慶長三年に、中世以来の和田宿を城下町として改編したのである。高崎では、総郭を「遺構」と称したという。(B<sub>1</sub>)型に比べると、都市プランは整備され、街路は直交して格子型となり、短冊型の町屋ブロックが配置され、整然たる地域制が看取される。しかし、総郭内部にはかなりの田畑をも含み、これは「明治に至るまで停車場附近では残されていた」<sup>⑨</sup>。

飯田 建保年間、坂西氏の居館構築にはじまるが、天正一〇年間（一五八二）、毛利氏が入部してより城下町建設が行われ、文禄年間、京極氏によって「京都ノ町割ニ準ジテ」町割の実施をみた。



脇坂氏時代の城下図によると、天龍川の支流松川と谷川とのきざむ段丘脈端に位置し、その急崖（比高五〇～六〇メートル）以外の西北二面に惣堀と土壘とをもつて惣郭をつくっているが、——街道に沿つては郭外に一条の町屋が伸長し、その先端部、即ち城下への入口の両側には組屋敷を配備している。この惣郭外の部分は、正保五年（一六四八）に附加されたものである<sup>⑩</sup>。

伊勢崎 井上定幸「後進地小城下町における初期町役人の社会的承譜」には、主題の序章として、戦国期における赤石城近辺の市場集落が、慶長六年（一六〇一）入部の稲垣氏によつて近世城下町に改造された前後の景観が推定されている。「町の惣構えに松を植えたという記録」、「また町の外側には御囲土手として、四間から三間くらいの幅をもつた土手が廻らされてあつたという記録<sup>⑪</sup>」からすると、明らかに惣郭型ということになる。また町割や道路にも、小規模ながら城下町特有の計画性が認められるとされている点、(B<sub>2</sub>)型プランに属するかと思うが、城下の主要街に当る本町その他に、分附関係の内百姓を従属させる町百姓が数多かぞえられる点、居住地区からだけ云つても、土・農・町の未分明な(B<sub>1</sub>)型的要素を、かなり持続したものと推定される。

長岡 元和二年（一六一六）、蔵王城に入部した堀氏が、長岡への城地移動に着手、その企図はつぎの牧野氏にうけつがれて、整然

とした「碁盤状町割」の城下町が完成された。「越後古志郡之内長岡城之図<sup>⑫</sup>」によると、城南の小頭町・上足輕町・千手町に当る部分以外は、新川・福島江など信濃川に注ぐ小川とその土手で囲われている。本図には「本書は牧野忠成公御官名有之、元和<sup>戊午</sup>歳御打入之砌の図也」とあるが、果して元和四年當時を写す図であるか、疑をもつ。建設期間のあまりにスピーディなる点、また街路方向が郭の内外で喰い違つている点などよりして、当初のプランは惣郭内のみで、惣郭外は後年附加されたもの、従つて本図もその時期になつてからの仮托ではあるまいか。

#### (B<sub>2</sub>)型→(C)型の移行について

この事例は、すでに(B<sub>2</sub>)型の項においても適宜、指摘したが、ここでは件の推移過程の顕著なるもの教例をかかげる。

丸岡 天正四年（一五七六）柴田氏の築城にはじまり、城下町もその頃から形成された。のち若干の領主の更迭をへて慶長一八年（一六一三）に本多氏、元禄八年（一六九五）に有馬氏に代つて幕末に及んでいるが、本多氏のプランは、天正期の柴田氏のそれをほぼそのままひきついだものと考えられている<sup>⑬</sup>。惣郭、直交状町割の(B<sub>2</sub>)型である。元禄九年以前、本多氏時代と、天保七年（一八三六）有馬氏時代の「丸岡御城下絵図」を比較すると、すでに前者にも惣郭外に足輕中間屋敷が若干置かれているが、後者になると、街道に

そつて町屋も郭外にのび出し、足輕屋敷も増設されている。武家屋敷は、本多氏（四万石）時代の九四軒に対し、有馬氏（五万石）時代は一七二軒である。したがつて本多氏時代図では内郭内部に「明

地」がみられるが、有馬氏時代図ではこれを埋めつくし、且つ本多氏時代の馬面町・籠屋町・南畑町の三町屋地区ならびに竹田口町組屋敷を取払つて下級クラスの武家屋敷たる善左町・弓町となした。

その結果、立ちのき地区内にあつた西勝寺・東得寺などとともに、町屋も総郭外に移転させられている。これが田町・西瓜屋町・東瓜屋町などである。田町組・五軒屋組・東瓜屋組なども、文化年間頃より形成されて行つた総郭外の組屋敷である。総郭外の発展はなお未成熟であつて、例えば彦根の如く当初よりC型プランをもつて建設された城下町とは自らことなる。いわば「B<sub>2</sub>↓C」型ともいうべき段階で、幕末を迎えたタイプである。

岡崎 大永年間以来、すでに松平氏の城市が生長しつゝあつたが、近世城下町としての設営は享徳元年（一四五三）〜康正元年（一四五五）頃の西郷氏にはじまり、文祿慶長期、田中氏によつて一段の整備拡張がはかられた。<sup>⑩</sup> 岡崎市史所収の「本多豊後守家時代」の図（寛永頃か）<sup>⑪</sup>では河流・空濠・土居をもつてする総郭型プランであるが、「水野家時代」（正保二年〜宝曆十二年）の図では総郭外南方および北方に足輕長柄組や小役人屋敷とともに町屋も増設され、天

保補益再板図や「本多中務大輔時代」の図では、総郭内部とほほ同面積に及ぶ町屋の発展が描かれている。

例えば、この天保図における郭外町の東端に描かれている投町でも、夙く正保二年の領主交替時か、或いは慶安二年（一六四九）の検地、あるいは下つても寛文〜元禄期までには町廻りの中に入れられたと考定されているから、<sup>⑫</sup> (B<sub>2</sub>↓C)型の移行は、水野氏時代のうちに、十分了つていたことになる。連尺町も「初め大殿町と称して半ば諸士の」住居と混在していたが、寛永の頃に総郭内の東北端に移されたのである。<sup>⑬</sup> 恐らくこの時期に総郭内部の土・町居住区の明分化がさらに進めはじめられたのであろう。しかし、本多氏るときは未だ郭内の整備に了つたのではあるまいか。というのは、もとは総郭内の横町の続きに位置していた六地藏町・唐沢町・祐金町が、総郭外に移転せしめられ、そのあとが武家屋敷を以て埋められて行つたのは、水野氏の入部（正保二年）と同時だからである。もつとも水野氏も総郭内の町屋を全て外へ出したわけではなく、連尺町・材木町・肴町・田町などを残しているが、——それゆえC型なのであるが——、水野氏のプラン方式には、それを徹底させればD型に転化する意図が看取できる。

郡山 近世城下町としての縄張りが開始されたのは天正六・七年頃である。ついで天正一三年（一五八五）入部の豊臣秀長によつて

改修が加えられるが、未だ外濠はない。(B<sub>2</sub>)型になったのは文禄四年(一五九五)増田氏の惣堀構築によつてである。しかし、一時、廃城となり元和元年(一六一五)、水野氏によつて再興、延宝七年(一六七九)松平氏、貞享二年(一六八五)本多氏一萬石の入口によつて最盛期を迎える。「元和・寛永のはじめ、外堀の内に限られていた町屋も、本多大内記の入口以後(略)、北で西奈良口が出来た外、南で柳町四丁目に続いて五丁目が城外にはみ出してつくられた」、こうして「外町十三町」が成立する。(C)型となつたのである。

松江 慶長五年(一六〇〇)、堀尾氏の建設期は総郭型であるが、寛永一五年(一六三八)松平氏入部以後の城下図では、総郭外に、さらには大橋川をこえた白潟方面一帯が町屋化されている。

高山 天正一八年(一五九〇)金森氏が建設の当初(長世・可重時代)は、宮川以東・江名川以南の地域に整然たる町制プランをもつて経営され、ほぼ(B<sub>2</sub>)型といえるが、三代重頼の頃から上記二河川をこえた対岸にも発展して行つている。

姫路・岡山などの大城下も(B<sub>2</sub>)型プランを基礎として発展して行つたものである。またつぎの二例は(D)型とも解し得るものである。

松代 天文一二年(一五四三)武田氏の築城にはじまるが、その発展は慶長九年(一六〇四)入部の松平氏、ことに元和八年(一六

二二)以降の真田氏時代を迎えてからである。外郭は武田氏時代から設けられていたようであるが、それは当初から「城下の十分の六」しか包含していなかつたのであろうか。元和八年の図をみると、総郭内部が関屋川によつて二分され、関屋川以西は武家屋敷のみによつて占められている。つまり見方によつては(D)型であり、紙屋町や博労町も、以前は総郭内にあつたものが、(D)型プランを実施するに際し、総郭外におし出されたのではあるまいかとも思われる。当初から元和八年図のプランであつたとすれば(C)型であるが、以上の推測が許されれば、(B<sub>2</sub>)↓(D)である。少くとも(B<sub>2</sub>)↓(C)であることは明らかである。

広島 天正一八年(一五九〇)、毛利氏によつて殆んど完成された。太田川下流の分流とその土手によつて(B<sub>2</sub>)型を呈し、浅野氏の入部によつてさらに総郭外も町屋に編入されてゆくが、いわゆる城郭内部は武家屋敷のみで占められている点、(D)型とも解し得るであろう。

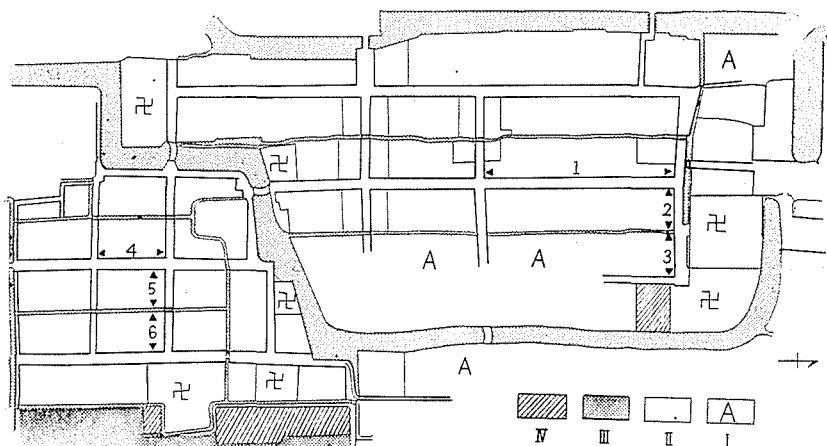
#### 〔補説1〕 町割と屋敷割

城下町プラン全体の推移は、細部の町割・屋敷割にも変化をもたらす。町割ならびに屋敷割についての詳細な検討は、「後記」の如く、省略することになつたが、ここで、二例のみあげておく。

延岡 高橋氏により城郭とともに慶長六年(一六〇一)〜七年

にかけて新設された。当初設営されたのは城東の南町・中町・北町の三町のみで、五箇瀬川北岸の三町は、元和元年（一六一五）、大瀬川原の柳沢町は有馬氏の代になってから、即ち明暦元年（一六五五）の成立である。石川恒太郎の論致に描かれている図によると、当初の三町は前記二河川及び堀川をもつてする総郭中に入り、直交状の整った町割である。ここまでは(B<sub>2</sub>)型である。これを内町として、北岸の三町（及び柳沢町）の成立をみたときが(C)型プランの完成期である。いずれの(C)型プラン城下町においても、その建設期間中だけをとれば、先ず郭内の設営から始まるので、(C)型はみな短期間にせよ(B<sub>2</sub>)型の時期をもつているわけである。

ところで、内町はほぼ五〇間×六五間の四ブロックを「田の字」形に配置してあるが、外町は東西一二〇間の紺屋町と六〇間の元町の境から、南北に一二〇間の博労町が出て、丁字形をなしている。柳沢町は長さ一四〇間で、これまでのほぼ六〇間一町の制とは、異質的なものである。また横町の道路が、内町では一間であるのに対し、外町では二・五間から三間に広められている。また大垣も、関ヶ原役以前の「古来町」までは(B<sub>2</sub>)型であるが、慶長六年（一六〇一）以後、総郭外に「出来町」が出現し(C)型となった例である。第3図は、「古来町」は約三〇間を短辺とする短冊型であるのに対し、「出来町」に属する新町の方は、約三〇間



第3図 大垣における「古来町」と「出来町」の町割（享和元年「大垣町絵図」による）

- I…御家中家舗, II…町屋, III…御年貢地, IV…田畑,  
 [▲印] (1)…71間, (2)…16間1尺, (3)…17間, (4)…28間6寸,  
 (5)…14間4尺, (6)…15間5尺。

四方の碁盤状町割をとつていて與ふかい。なお、同図は、短冊状、碁盤状のいずれにせよ、その屋敷割は表通り両長辺が各戸の開口の総計となり、裏行約一五間、裏の境界線には溝がほられていることを示す。諸国の城下町が「京風ニ倣フテ」碁盤状町割をなしたとは、屢々とかれるところであるが、それは藤田元春の京都市地割の分類でいえば、「A、方一町」ではなく「B、短冊形」の方を採用したケースが多いように思う。しかして、寛永江戸町の町割の如くに、各ブロックの中央部に閑地（寛永図の黒填部分）をもつ形式ではなく、ほとんどの城下町が、裏行の二倍をもつて短冊型の短辺とする屋敷割をとつているようである。

(D)型および(D)型の形成過程について

松本 元正元年（一五〇四）、小笠原氏の支族島立氏の深志城築城からはじまるが、近世的城下町は、小笠原氏の天正一三年（一五八五）より三カ年にわたつて建設された。「此時、柳町（泥町と云へるを改め）、地藏清水辺の町家を悉く、本町其の他に移す。又城内即ち大名町・柳町・地藏清水を地割して待屋敷とす」とある。「維新前之松本町図」にみえる完全な(D)型は、すでにこの時、既存の町屋を郭外に出すことによつて成立していたことになる。柳町・地藏清水町は、大手前に位置する。——恐らく天正一〇年以前は(B<sub>2</sub>)型に近いプランをとつており、(B<sub>2</sub>)↓(D)型となつた筈である。

吉田 「尾州名護屋・三州吉田ノ如キハ城町共ニ二度ニ出来ルニヘ侍ト町トノ差別有テ正シキ也」というが、これは池田氏の(D)型の実施期についていえることであつて、吉田はすでに鎌倉期より渡津集落として発展、天文頃より今川氏の支城がおかれ、永祿には酒井氏の城下町であつた。天正一八年（一五九〇）入部の池田氏によつて城下町プランの整備が進められてゆくが、彼は「川毛辺にあつた真宗寺院を抱六町へ、八町にいた鍛冶職を元鍛冶町に移し、そのあとを武家屋敷とし」、郭内を武家屋敷のみで埋めたのである。

松岡 正徳三年（一七一三）頃の「松岡家中絵図」は、小規模ながら濠と土居とを以て、士・町が明分され典型的な(D)型を示している。城下町の建設は正保二年（一六四五）であるが、以前は、藤島庄上之郷また芝原之庄と称する集落が形成されていたと推定されている。しかし、松岡の場合は、既存集落の都市化の程度は問題にならないから、前記の(D)型形成因（第I章(D)型の項）でいえば④にあたる例とならう。

田辺 城下町としての町割は、慶長一一年（一六〇六）江川浦洲崎城からの移築にはじまり、元和五年（一六一九）、安藤氏の入封後、一だんと拡大整備されたものであるが、湊地区には、古くより「牟婁ノ津」がさかえていたわけである。「千福様御代之図」（第三代義門時代）によると、濠内には武家屋敷のみがみられる(D)型と

なっている。

高田 慶長一九年（一六一四）、福島城をすてた松平氏によつて建設された。代表的な近世城下町プランとして（即ち(C)型として）よく『概説』のなかにひかれる「松平中将時代之高田図」も、外濠をなしている向橋川よりさらに城に近い「青田川線の内側―東側」を「高田では郭内」と称ぶそうであるから、極く一部の町屋の混入をみるが、ほとんど(D)型と見做すこともできる。というのは、この「郭内」の若干の町屋は、爾余の(C)型城下町の内町ではなく、高田の主要町屋は大手前の「馬出の辻」附近（郭外）だからである。

高田は国府（直江津）↓春日山↓福島↓高田と、この地域を再移転・三転して最後に建設された城下であるから、城下各町の沿革をみても、国府以来の旧家が多い。向橋川をもつてこれらをも囲いはしたが、武家屋敷との間には、土居あるいは濠をもつて一線を劃した所以であろう。

勝山 天正三年（一五七五）、柴田氏がここより東北一・五キロにある村岡山城より移つて築城した。慶長初期の松平氏入封当時はまだ神明古社（上位段丘面にある）や、義宜寺<sup>⑧</sup>などをとりまく若干の民家よりなる集落であつたのが、次第に成長し、元禄四年（一六九一）入部の小笠原氏によつてさらに整備されたプランが実施された。<sup>⑨</sup>小笠原氏入部後と思われる「勝山城下之図」によれば、上位段

丘面は武家屋敷のみ、下位段丘面は町屋のみと、截然と区分されており、濠・土壘の如きものこそないが、地形を利用した(D)形と目し得る。

山形 延文元年（一三五六）、出羽按察使として斯波氏が入つており、文禄年間、最上義光が山形城を築く以前に、すでに小規模な城下町が形成されていた。義光時代の都市プラン図は、東西二二〇間×南北二三五間×五一、八〇〇坪という城郭で、武家屋敷は、この広大な郭内はもちろん、城東の市場町、さらにその外側の職人町の東方にあつて、二一五七軒分の屋敷割をのせているという。町屋は郭外で、街道沿いの一筋のみである。(D)型プランということがで

きる。ところが、元和八年（一六二二）最上氏が改易となつて以後は、領主の交替しきりであるが、いずれも最上氏六〇万石の規模でのプランは大きすぎ、例えば保科氏時代の図では、かつての東方の武家屋敷は消え、最後の水野氏時代のそれは、城郭内三〇〇〇石の田地の中に、五〇五軒の武家屋敷をのこすという状態まで縮小してきている。<sup>⑩</sup>

宇都宮 中世以来の関東の豪族宇都宮氏の居城で、応永頃にはすでに城下町が繁栄していた。慶長四年（一五九四）入封の蒲生氏郷は、以前は城の東北部のみであつた城下を、広馬場の西にも拡大し、

さらに本多氏が駅路を上町にうつすなど、都市プランに改造を加えている。宝永・正徳頃の図<sup>⑧</sup>によると、水濑および土塁・石垣をもつて限る郭内は武家屋敷のみである。

**若松** ここも元中元年（一三八四）芦名氏築城以来の城下町であったところへ、天正一八年（一五九〇）入部した蒲生氏が、文禄元年（一五九二）から城地の修築とともに、甲賀町以東を新設するなど、城下町プランを大改造して(D)型となしたのである。新編会津風土記に「菟名直盛城築ノ時ハ今ノ内郭ノミニテ、外ニハ士民雜居シ又ハ寺院ノ道場ナドアリシガ、蒲生氏就封ノ後、文禄元年、今ノ内郭ノ四方数町ニ土居ヲ築キ陸ヲ環ラシ外郭トシ、初テ士民ノ居ヲ分ツ<sup>⑨</sup>」とある。

なお、ここで「内山下」の変質についてふれば、右の若松では遅くとも寛永初期頃と思われる蒲生氏時代の「若松城下図」では「内山下」を形成していた「三ノ丸」が、保科氏時代の「鶴ヶ城本丸図」では城内広場に転化しているという。この他弘前でも、はじめ城内にいた一門重臣たちが、城外に武家屋敷（現在の下町）をつくつて移転している。また高松でも、城内の曲輪にあつた近親重臣邸を、のちには外郭内に移している。福井については次にのべる。

**福井** 天正三年（一五七五）、一乗谷城をすてた柴田氏が築城、

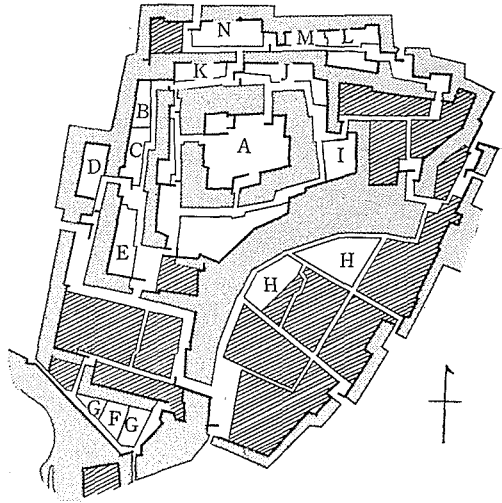
天正六年頃には一乗町ができたのをはじめ、城の西部の町割は柴田氏時代に完了したものと思われる。慶長六年、結城氏が入部して、一一年に至つて本丸の移転その他改築工事をおわり、一方、城北部の町割をおこなつた。<sup>⑩</sup>万治二年（一六五九）大火以前「福井御城下之図」にしめされているところが、このときのプランを示すのであろうか。長浜町などごく一部を例外として、町屋はすべて総郭外におかれ、(D)型プランを採っている。

その後における寺町の移動などの部分的プランの変更、街道沿いの(E)型プランの添加と解しうる新町の増設などについては、すでに他の城下で縷説したので省くが、ほかに私が興味を感じたのは次の二点である。

一つは「内山下」の公用地化過程で、四葉の各時代の図を照合するとき、第4図の如くその進行を整理することができる。

いま一つは先に「補説1」としてふれたところの、建設時期における町割の相異ということである。（以下の数値は、松原信之が三〇〇〇分の一〜六〇〇〇分の一航空写真地図と古図とを基に、七五〇〇分の一のスケールに復原された城下図を計測した概数である。）

福井の如き大城下になると、町割もまた幾種もの型の組合せによつて成立している。(1)先ず、結城時代あるいはそれ以前よりあつたと想定される城西では、碁盤状というより、一辺の長さ二八〜三〇



第4図 福井における「内山下」の公用地化過程

(〔I〕慶長19年「北庄古図」, 〔II〕万治2年大火以前, 〔III〕貞享2年 〔IV〕文化3年の各「福居御城下之絵図」による。)

- A…本丸, B 五条茂右衛門・窪寺善兵衛屋敷 [I図] → 花島 [II図] → 御座所 [III図],
- C…小川吉左衛門・鈴木勘由・長谷川筑後屋敷 [I図] → 御座所 [III図], D…斎藤民部屋敷 [II図] → 評定所 [III図], E…有賀左衛門屋敷 [III図] → 御用屋敷 [IV図], F…同心屋敷 [I図] → 武家屋敷 [II図], G…足輕屋敷 [II図] → 武家屋敷 [III図], H…山田伊織ほか武家屋敷 [II図] → 御茶園 [III図], I…長松院様屋敷 [I図] → 二ノ丸 [II図] → 御作事所 [III図], J…御楼木島 [II図] → 御茶屋 [III図], K…武家屋敷 [I図] → 御楼木島 [II図] → 御花島 [III図], L…長崎平右衛門屋敷 [III図] → 御應部屋 [IV図], M…山崎主膳屋敷 [I図] → 御應部屋 [II図], N…大谷助六屋敷 [II図] → 東照宮・泉藏院 [III図]

間程度の菱形ブロックより構成されている。(2)これが城北部にうつると松平氏入部後の新しい町割、即ち(1)の一稜、即ち二八〜三〇間を短辺とする短冊型町割となる。屋敷割は、前記(補説I)の如く、この短辺を二分したもので、即ち一四〜一五間を各屋敷の裏行とするのである。(3)城下入口の部分では、裏行一二間ほどの街村状の町屋が、街道両側につづいている、といった具合である。

〔補説2〕 多核的都市プラン

以上、第五節の事例に多く中・小城下町をあげたのは、それらが

「単核都市」だからである。大城下では城以外にも副次的核(例えば江戸の如く社寺や大名屋敷)をもつ、小川琢治のいわゆる「多心都市」になり、複雑な変型(C・D)型となるため、これらを次回の検討に譲つたのである。

しかし、ここで江戸以外の例を若干あげれば、「城ヲ中ニシテ八方へ町割ヲナス者東都ノ外ニハ金府バカリナリ」(城下得失考)といわれた金沢があるが、明治一三年の「皇国地誌」により城下の幅員識別ロードマップを作製すれば(図省略)、城郭をめぐる、



ほぼ四間以上（大手前では一〇間をこえる）の環状線が、城下に入り来る諸街道をここでつなぎとめている様相が明瞭になる。これらの街道に町屋が沿つて、街道+町屋+武家屋敷+町屋+街道+町屋……というサンドキッチ式が反復されるプランをとつているが、この場合は街道そのものが町屋形成の副次的核ともいえるし、散在するいくつかの武家屋敷群をそれとみなすこともできよう。

ついでながら十間以上の広幅員道路の出現は、提封の石高よりは、町屋人口が決定するものと思われ、江戸・名古屋・金沢など、町屋人口のみでは五〇万というのが限界線になつてるように推測する。

仙台の町屋も(1)城の大手を中心とする慶長創設期のプラン、(2)寛永五年（一六二二）建設の若林城「政宗晩年の居館」を核とする「小城下町」の出現、(3)承応三年（一六五四）造営の東照宮を核とする門前町の町屋の形成、(4)延宝年間造営の釈迦堂の門前町を中心とする新しい町割、という四期におけるそれぞれ核が指摘されるし、このほか和歌山の如き大城下プランの出現にも、桑山氏・浅野氏時代の大手と、元和五年（一六一九）入部の徳川氏によつて一八〇度向きをかえてつくられた新しい大手という二つの核が想定でき、また堀川・伝法川・新堀川などの城下水運ルートが、町屋形成の営力として働いたことも考えられる。

なお熊本の本宝永前後の城下図にみえる城下南部（古町方面）の寺院密集地区は、軍事的・水防的役割をもかねたではあろうが、寺院を各ブロックの中央におき、一町一寺のプランを採っている点、それぞれ門前町の集合体を以て、城下発展の一つの副次的核にせんとする意図をも藏していたのではないかと考える。

〔後記〕 本稿は以上をもつて第一章とし、第二章「近世城下町プランにおける町割と屋敷割」では、I 城下町の面積的規模と人口規模、II 武家屋敷と町屋との面積比、III ブロックと屋敷裏行、IV 町屋における屋敷割の基本的規模、V 武家屋敷規模の階層性、VI 道路計画を述べたのであつたが、紙数の都合上、この後半を割愛することになつた。別に報告する。

（註）

- ① 拙稿「彦根藩における地方知行について——大名領国の歴史地理的研究」目論見のうち——」（人文地理 9 卷6号）一九頁以下。
  - ② 例えば近くは藤岡謙二郎「城下町の地理的研究の課題」（現代地理講座『都市と村落の地理』昭三一 所収）に、一〇項目余の主要ポイントが指摘されているし、私も先にこれに蛇足をふした（『封建都市に関する若干の問題点』藤岡謙二郎ほか共著『歴史地理・郷土地理』昭三三）一一〇～一三三頁）。
  - ③ 奥井復太郎「独逸都市計画の史的考察」（『都市地理研究』昭四 所収）五五頁。
  - ④ 同右、四六頁。
- ⑤ H. J. Fleure: Some Types of Cities in Temperate Europe,

Geogr. Review, 1920 pp. 357~374. 拙稿(前掲書②) 一一六  
~一二八頁にこの要約を紹介)。

⑨ R. E. Dickenson: Morphology of Medieval German Towns,  
Geogr. Review, 1945 pp. 74~97.

⑦ ついでながら、城下町立地の自然地理的な考察も、従来の研  
究にまま見られた様な、単なる標高の比較であるとか、その立  
地地形の大まかな分類(孤立丘、台地先端、臨海・臨湖 etc.)  
の如き『概説』をこえて、例えば「城下の身分別居住区と微地  
形との関係、濠の開鑿や河川つけ替えの水理学的研究、当時の  
土木技術の復原等々の側面から、再検討する要があるように思  
われる。

⑧ 豊田武「城下町の機能と構造」(地方史研究協議会編『日本  
の町』昭三三 所収) 四一~五五頁。

⑨ 松本豊寿「古地図よりみた江戸時代初頭における近世城下町  
の都市域の構造」(地評 三〇巻八号) 二〇~三三頁。

⑩ 松原信之「若越城下町古図集 解説書」昭三二

⑪ 例えば原田伴彦「中世に於ける都市の研究」からも多くの例  
を教えられる。

⑫ 藤岡通夫「城と城下町」昭三二。一八三頁に図が載せられ  
ている。

⑬ 藤岡謙二郎 前掲② 特論 二二四頁。

⑭ 原田伴彦「中世都市から近世都市へ——その景観的変容——」

(人文地理 八巻六号) 五頁。

⑮ 都市の開郭については諸先学の考察があるが、藤岡謙二郎

「城下町の地理的性格に関する二、三の考察」(人文地理特集  
号 歴史地理学の諸問題 四〇頁)では環濠集落との関連に注  
目しておられる。

⑯ 藤岡通夫 前掲⑫ 七三~七四頁。

⑰ 豊田 前掲⑧ 四二頁以下。また松原 前掲⑩ 三頁。

⑱ 『明治以前日本土木史』 一一一六頁。

⑲ 町屋地区のさらに外側に組屋敷などをおくことを、ここでは  
専ら防禦という視点から「カヴァする」という表現をとつたの  
であるが、これには「大国ノ主、大キナル城下ニ侍ト町屋ト各  
別ニシテ内外トスルトキハ、町ヘノ手寄アシク不調ニヨリ、往  
還筋ヲ町屋トシテ町ノ外ニモ入交リテ割事アリ」(極密要論)  
という事情にもよつたであろう。しかし、しかもE型以前では  
町屋の方を内側にしてある点、やはり軍事的配慮を無視できぬ  
のである。

⑳ 原田伴彦「日本封建都市研究」昭三二 第二編第一。

㉑ 松本 前掲⑨ 二三頁。

㉒ 豊田武「日本の封建都市」昭二七 二七三~四頁。また彦  
根については拙稿「城下町の人口構成——彦根藩の歴史地理的  
研究——」(史林 三七巻二号) 七二頁。

㉓ 菅沼好一「中津藩に於ける外店の成立」(史淵 四三)

㉔ 西沢武彦「近世城下町における町人町の構造——信州松代町  
の場合」(前掲⑧ 所収) 八三~一〇〇頁。

㉕ 「概説広島市史」昭三〇 四五頁。

㉖ 例えば鹿児島城下の集成館。

- ②⑦ 上原徳「城下町転移の地理学的研究——特に高崎に就いて——」『大塚地理学論文集』五 所収
- ②⑧ 小野均「近世城下町の研究」昭三 一二一頁。
- ②⑨ 島田豊寿「初期城下町の歴史地理的研究」昭三一 一九八頁以下。
- ③⑩ 『日本地名事典』 2 昭三〇 四九五頁 所載。
- ③⑪ 『西尾町史』 昭九 上巻 九六頁。 ③⑫ 同上書 所収。
- ③⑬ 『新編武蔵風土記稿』一〇巻 埼玉県ノ部。
- ③⑭ 『埼玉県史』 大1 所収。
- ③⑮ 上原 前掲②⑦ 二二三頁。
- ③⑯ 『飯田万年記』 伊奈資料叢書 大五
- ③⑰ 井上定幸「後進地小城下町における初期町役人の社会的系譜」(前掲⑧ 所収) 一九一頁。
- ③⑱ 『長岡市史』 昭六 所収。
- ③⑲ 松原 前掲⑩ 二九・三〇頁。
- ④⑩ 長尾正憲「岡崎城下町の歴史地理的研究」(歴研 八巻七号)
- ④⑪ 『岡崎市史』第三巻 昭二 四・五頁。
- ④⑫ 同右 四〇頁。 ④⑬ 同右 二二五頁。
- ④⑭ 同右 三一頁。 ④⑮ 同右 二〇八・二四七・二五二頁。
- ④⑯ 『郡山町史』 昭二八 一九六〜二〇〇頁。
- ④⑰ 同右 二八六頁。
- ④⑱ 野津静一郎『松江市誌』 昭一六 所収。
- ④⑲ 吉岡勲『岐阜県の歴史——近世』 昭三一 三九八頁。
- ⑤⑩ 小野 前掲②⑧ 一三〇頁。また谷口達夫「城下町岡山の成立」
- (魚澄惣五郎編『大名領国と城下町』 昭三二 所収) 一五三〜一五五頁。
- ⑤⑪ 『松代町史』 昭四 四頁。 ⑤⑫ 同右 一七九頁。
- ⑤⑬ 西沢 前掲②⑩ 所載。
- ⑤⑭ 前掲②⑨ 四三〜四七頁。また同書所収「寛永年間広島城下之図」。
- ⑤⑮ 石川恒太郎「延岡城下町の建設計画に就いて」(社会経済史学 五巻一號) 九〇〜一〇〇頁。
- ⑤⑯ 『大垣市史』 中巻 昭五 所収。
- ⑤⑰ 藤田元春『平安京変遷史』 昭五 三二〜三六頁。
- ⑤⑱ 『松本市史』 上巻 昭八 七六六頁。図も本書所収。
- ⑤⑲ 『枢密要論』(但し小野前掲②⑧ 一三四頁所引)。
- ⑥⑰ 伊藤郷平編『地方都市の研究——新しい豊橋』 昭二九 一六頁。
- ⑥⑱ 松原 前掲⑩ 二一〜二三頁。
- ⑥⑲ 『和歌山県田辺町誌』 昭五 所収。
- ⑥⑳ 『高田市史』 第一巻 昭三三 六八頁。
- ⑥㉑ 「勝山城下之図」では町の北端に位置しているが、他の寺院の計画的配置より考えて、宝永六年入部の小笠原氏によつて移転をせられたものか。以前は上位段丘面にあつたのではなからうかと思う。
- ⑥㉒ 前掲⑩ 三三〜三四頁。図も本書。
- ⑥㉓ 長井政太郎『山形県新誌』 昭二五 一一〇〜一二一頁。
- ⑥㉔ 大島延次郎「宇都宮の発達」(前掲⑧ 所収) 一〇七頁。図

は本書所収。

⑧ 花見朔己編 大日本地誌大系 第三〇卷『新編会津風土記』

一 昭七 一五七頁。

⑨ 前掲⑧ 二四頁。

⑩ 『日本地名事典』 1 昭二九 三二八頁。

⑪ 『高松市史』 昭八 五二一頁。

⑫ 前掲⑩ 五二〇頁。

⑬ 小川琢治『人文地理研究』 昭三 一〇〇頁。

⑭ 『金沢市史』 市街篇 第二 大正六 第一章。

⑮ 拙稿「畿内における城下町規模と提封」→大名領国の歴史

地理的研究」一つの試み——(藤岡謙二郎編『畿内歴史地理研究』所収)で、提封と城下人口の相関々係、領内人口の城下町集中度について考察した。

⑯ 江戸には二〇間その他広幅員道路、(前掲⑮ 一二三五頁)、

名古屋屋については一三間の広小路(小栗田 亮『旧城下町景観』

「地理論叢 七輯」六六頁)がある。

⑰ 小倉強「仙台の市街及び土木建築」(『仙台市史』3 昭二五)、  
三七七頁。なお仙台の項は本論致による。

⑱ 『紀伊統風土記』第一輯 明四三 八二頁。

⑲ 近藤忠「藩政時代の紀ノ川水運」(藤岡謙二郎編『河谷の歴史地理』 昭三三 所収) 三五五〜三五六頁。

⑳ 『熊本市史』 昭七 二九九頁。図も本書所収。

〔付〕 稿了後、小林清治氏に「いわゆる『城下町』の構造」(福

島大学学芸学部論集 八卷一号)のあるを知り、拝見した。小野均「近世城下町の研究」以来の「城下町」なる語の用法及び概念の誤謬を指摘されたもので、教えられるところ多かつた。しかし、①小稿もさしづめ、「近世城下プランの云々」と改題せねばならぬかとも思うが、小稿は、いわゆる「城下」のみならず、城の位置をもふくめた「城下都市計画」を対象としているわけであるから、敢て改める要もなからうと思う。②城郭と城下との関係について論じておられる部分は、もつとも小稿と関連のあるところであるが、氏が同一城下におけるプランの変化をも考慮に入れられ、従つて三〇頁の分類のごときも、何時の時期の城下プランについてであるかに注目して行われたならば、われらを裨益することさらに大であつたらうにと残念である。

tion, resulted in feudalization of “*Sō*” and purification of cities. As its process, however, has not fully been cleared for lack of its original sources, in present conditions it is difficult to clearly understand the purification of cities by the *Oda-Toyotomi* (織・豊) administration.

In this article such difficulties are to be overcome by using some new sources in studying cities in the era as an epoch of feudal cities.

## Development Form of the Castle-towns' plan in the *Edo* Era—An Introduction

by

Kazuhiko Yamori

It is true that studies on the castle-town have been said to be in the stage beyond “morphology”, but its systematic research seems to remain unaccomplished; for instance, to trace back the lineage of the castle-towns' plans is at the very beginning.

In this article, we will set five styles in the castle-towns' plans in the *Edo* era to consider the series of their development. To make our point of argument simple, in the first chapter is “hypothesis” as an outline for the time being; in the second chapter it will be exemplified.

## On the Social Organization of the Temple in the City-state of *Lagash* in Sumer

—around the problem of the allotment-holders—

by

Shigeru Yamamoto

Economy of the Sumerian temples has a large extent of influence upon the economic growth of ancient western Asia. Manysided details of the temple economy is to be found only in those records of the Bau temple, through the analysis of which we are going to approach to societies in the western Asia, owing to the fundamental monographs by A. Schneider and P. Anton Deimel.